

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	野外教育実習に参加した大学生の態度の変化
別タイトル	Attitudinal change on university students who participated in outdoor educational program
作成者（著者）	中山, 恵一
公開者	東邦大学教員養成課程
発行日	2021.08.31
ISSN	24358290
掲載情報	東邦大学教職教育研究. 1(4). p.19 23.
資料種別	紀要論文
内容記述	実践論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD81174302

野外教育実習に参加した大学生の態度の変化

Attitudinal change on university students who participated in outdoor educational program

中山 恵一

Keiichi NAKAYAMA

1. 野外活動の効果

昨今、キャンプがブームになっている。特にソロキャンプが注目され、非日常体験ができることに興味関心が高まっている。レクリエーションとしての野外活動の効果は、人生の質の向上という観点からこれまでに報告されている。また、協調性、社会性や自己概念、自己有用感、積極性、問題解決能力などを向上させる効果があることも、これまでの研究で明らかになっている。また、非日常生活で経験したこと、気づいたことを日常生活で応用させることにより、野外活動が大変有効な学びの機会となる。すなわち、野外活動とは、野外教育の実践の柱であると言える。

2. 目的

本論は、筆者が本学の「特別活動論」Cコースを担当していた期間のうち、野外教育実習を実施していた2012年から2015年までのデータを基に、履修した学生が実習期間中にどのような変化をしていたのかを明らかにすることを目的とする。

3. プログラム概要

野外教育実習は、長野県佐久市の山中で実施された。通常は施錠されている林道を上がり、まったく人の気配が感じられることのない

山中へ行く。とある大学のワンダーフォーゲル部OB会が活動のために建てた山小屋があり、そこをお借りしていた。炊事場、トイレ、風呂はあるが、当然、インフラはない。スタッフとして、筆者のほかに筆者が指名した者（1名又は2名）を帯同させた。

3.1 基本方針

プログラムは、2日目にロッククライミングをすることだけ伝えるが、それ以外、スケジュールを含め、活動内容、手順などは学生が決めることを基本としている。教員側から、何時に何をやる、といった提示はまったくしないため、最初は学生から「放っておかれる」や「何もしてくれない」と言った不満が聞かれることもある。それでも何もしていない。そうすると、食事ができなくなる。教員としてはそれでも良い、との覚悟の上でこの手法を採り入れている。精神的、身体的限界を超えそうな場合は、スタッフが介入する準備はしている。

3.2 プログラム内容

3.2.1 自然環境への配慮

実習地は人の手がほとんど入っていない場所である。そのため、環境に配慮することを意識するには、非常に良い場所である。この

ことは、買い出しをする場面から始める。「環境に配慮した買い物をするように」と指示をして、学生に自由に選ばせる。レジに進む前に「何に配慮したのか」を問う。例えば個別包装ではなくまとめて買えるものがあれば、それを指摘する。山では生物分解性の洗剤を少量だけ用いたり、洗う前に汚れを先に拭いたりしておくなどの配慮もアドバイスする。

3.2.2 ロッククライミング

ロッククライミングは、実習地から車でさらに40分ほど移動したところで行う。トップロープと呼ばれる手法で行い、登る者(クライマー)とクライマーのロープを地上で確保している者(ビレイヤー)がペアになって行う。難易度の異なる2コースを設置する。

3.2.3 目隠し移動

ロッククライミングへ向かう際、実習地から駐車場、ロッククライミングをする場所の駐車場からロッククライミングの場所までの2か所で、ロッククライミングのペアの片方が目隠しをして、もう片方が誘導をして歩く、というアクティビティをする。

目的は、学生に対しては「目が見えない人の感覚を体験する」や「相手の立場に立って誘導する」と伝えるが、真の目的はペア同士の精神的な距離を近づけることにある。頼り、頼られ、の関係性になり、また誘導するにあたり多少の身体接触も生じるため、ペア同士の関係性の醸成が促進されやすい。

3.2.4 振り返り

夜、全員で集まり、その日を振り返って印象に残っていることを話し合う時間を持つ。ある学生が何か行動を起こしたことについて言及したならば、その時の気持ちを質問したりもする。さらに、ファシリテーターと呼ばれる進行役が、日中観察していた様子をグループに投げかけ、それを基に肯定的な話し合い、「深掘り」をしていく。どこが悪かった、どこを反省して、というような、いわゆる「反省会」では決してない。振り返りとは、

今日の気づき、学んだことを次の日や日常生活に活かすための橋渡しである。

話し合い形式の振り返りに加え、記述式の振り返りとして「ジャーナル」がある。なかなか話し合い形式では発言できない場合でも、ジャーナルではゆっくり自分のペースで考え、書くことができる場合がある。また、文字で書くことにより、自分の考えを客観的にまとめなおすこともできる。

4. 方法

本論では、提出されたジャーナルが分析可能である2012年及び2013年を研究対象とした。筆者がジャーナルを読み、キーワードとなる箇所を抽出した。それを「学生別」と「日程別」に分類し、分析した。その中から、ジャーナルに書かれた内容に一貫性がある学生を抽出した。ジャーナルに記述された内容の研究目的利用は、承諾を得ている。

なお、ジャーナル1は事前に、ジャーナル2は実習初日夜に、ジャーナル3は2日目夜に、ジャーナル4は3日目帰路の高速道路パーキングエリアで、ジャーナル5は帰宅して一週間後に、それぞれ記入したものである。

5. 結果、考察

4人の学生のケースを紹介する。()内の数字は、ジャーナルの番号と通し番号である。

5.1 学生Aのケース：グループ指向

学生Aは、いつも「グループ」というものを実習中に強く意識していたように思われる内容のジャーナルを書いている。そのグループに対して、本人がどのように関わるか、またグループがどう機能しているのかについて言及している。

- (1-1) 参加するメンバーはほとんど初めてで、交友を深めるいい機会。
- (2-1) 初めて出会った人でも、同じ目標を達成するために協力することで、コミュニケーションを深めることができる。

- (2-2) 情報や技術、知識を共有して作業できるよう気を付ける。
- (3-1) 自分だけが出来ることがあれば、他の人に教え、知識、技術を共有して、誰でもなんでもできるようにした。
- (3-2) みんなで協力することに慣れたのか、夕飯の準備がとても早かった。
- (3-3) 夜の振り返りで、みんなそれぞれお互いの良いところを理解しているのだと思った。
- (4-1) 仲間と協力し、それぞれ役割を果たさなければ、食べることすらできなかった。
- (4-2) 初日は何をしたらいいか、戸惑った。3日目になると、自然とグループのために貢献することができた。
- (5-1) 初日は2つのグループに分かれて作って食べた食事、2日目には全員で協力し、班とは関係なく仕事をしていた。

この学生は、全体的に「グループ指向」の記述が多くみられた。事前のジャーナルにおいても初めての人との出会いを楽しみにしており、初日に同じ実習の参加者とさっそく当初の目標の「交友」を深めている(2-1)。さらにいかにグループに「知識、技術を共有」することで貢献できるか(2-2)という翌日への目標を立て、次の日には達成(3-1)している。

目的を達成するために、自分に何ができるか、相手との「具合」を測りながら全体の利益のために行動した結果、「初日の戸惑いから自然とグループのために貢献」(4-2)できるという状態に変化したといえる。積極性、社会性が育まれた例である。

5.2 学生Bのケース：個人指向

学生Bは、自分自身に対して「挑戦」や「課題」を課し、それに対して自分がどう対応するか、ということについて言及している。

- (1-1) これまで、何かに集中して取り

組んだ経験がほとんどない。ロッククライミングを通して様々なことを学び、自分のためになるようなことを持ち帰りたい。

- (1-2) 自分ができるところまで、精一杯とりくむ。成功しなくても、自分が納得するまで頑張り続けたい。
- (2-1) 自分のやっていることが終わった後、どうすればいいのかわからず、ぼーっとしてしまっていた。
- (2-2) 夜の振り返りのときに、手を挙げて発言できなかった。キャンプが終わるまでにできるようになりたい。
- (3-1) 今日は何かを見つけて積極的に行動する、ということを常に考え、周りの人は何をやっているのかを意識して行動することができた。
- (3-2) 昨日は恥ずかしさが残って発言できなかったが、今日は積極的に発言できた。
- (3-3) 明日はもっとみんなとコミュニケーションを取り、仲を深めたい。
- (4-1) 初日に比べて自分のできることを見つけ、積極的に取り組むことができるようになった。
- (4-2) 少しでもみんなの役に立てることはないか、自分にできることはないか、と考えながら行動できたのは、成長できたと言えるのではないか。
- (4-3) 今後の課題は、少しでも早く素の自分を出せるように努力すること。2泊3日一緒に過ごしても、素の自分を見せたら嫌われてしまうのではないか、せっかく仲良くなったのに、みんなが離れてしまったらどうしようと考えてしまった。帰りのバスで素の自分を出せてよかった。
- (5-1) 自分はいま何をすべきなのかを常に考えられるようになった。

この学生は、事前に自らの課題を述べ(1-1, 1-2)実習に臨むが、実習初日には思うように結果が出ず、悔やむ表現「してしまっ」(2-1)が見られるが、克服したい

前向きな気持ちが表れている(2-2)。その結果、ジャーナル3ではかなり肯定的な変化が見られたことが述べられており、ジャーナル4では自らの行動が他者への与える影響ということまで言及している。すなわち、自分自身に課した挑戦が達成されたことにより生まれた自信が次への挑戦につながり、自信、ゆとりにつながり、周囲とのコミュニケーション、配慮に向いてくるようになった例であろう。

5.3 学生Cのケース：自己認識

学生Cは、自らの自尊感情の変化について述べている。

- (1-1) 自分の意志で何かをすることが少なかったが、今回は自ら行くと決めたので、絶対にキャンプを充実させたい。
- (2-1) 体力がなく、駐車場と小屋を2度往復するのが限界。
- (2-2) 正直、足手まといになっているような気がした。料理は作れないし、火の管理もできないし、ただライトを持って手元を照らすだけ。
- (2-3) 「なんでこんなこともできないの?」とか言われることなく「がんばれ!」とか「おつかれ!」とか言ってもらえ、仲間のやさしさを身に染みて感じられた。
- (3-1) ロッククライミングは、やる前から無理と思っていたが、仲間の支えなどもあって、小さいながらも、目標を立てて達成することができた。
- (3-2) 友だちがいつも手を差し伸べてくれて、私が一番苦手な高所にも行くことができた。
- (4-1) 小屋から駐車場までを3往復したけど、平気になった。
- (4-2) 全員で食事をとったり、後片付けもみんなでやったりと、一致団結する喜びを得ることができた。
- (4-3) 自分はいつも支えられて生活し

ていることを知り、仲間として支え合うことの素晴らしさを知った。

- (4-4) 日常生活で、仲間を想う気持ちを大切にしていきたい。
- (5-1) 素晴らしい仲間に出会えた。
事前は「絶対にキャンプを充実させたい」(1-1)との意気込みではあるが、実習に入ると初日には、「限界」(2-1)や「足手まとい」(2-2)という否定的な表現が多い。しかし2日目の目隠しやロッククライミングを経て、大きく認識が変わってきた。学生自身が価値ある人間であることを認識(4-3)するに至ったことは、大きな成果だと言える。自己概念の観点から述べると最も大きな変化は(2-1)で、「体力のために2往復が限界」と言っていたのが(4-1)で「3往復したけど平気」という点である。これは自己概念の変容によってもたらされた結果であると言えるだろう。

5.4 学生Dのケース：他者との関わり、コミュニケーションスキル

学生Dは、自らのコミュニケーションスキルや他者との関わりについて言及している。

- (1-1) コミュニケーションの向上を期待している
- (2-1) 班の人に対して壁を感じている。まだ打ち解けていない度合いを考えると、コミュニケーション力の無さを感じる。
- (3-1) 今までの人生で、会話をしていると思うことがなかったが、今回のロッククライミングで他人を知ることが面白いことだと実感した。
- (3-2) 会話をするというのは相手を知ること、相手を知るといのは表面的なことと内面的なことの両面を知ることだと気が付いた。
- (4-1) 自分人間としての小ささや未熟さを思い知り、1日目、2日目は他人と比較してしまい、自分の素を人に出すことが

できなかった。

- (4-2) 今日は表情豊かに話せていたと思うが、話す相手が特定であった。
- (5-1) 普段の学生生活ではやる機会のないことを他人と共同して行うことで、他人を知る楽しさや喜びを実感し、他者への関心が高まった。

ジャーナルから、「人生で、会話をしていて楽しいと思うことがなかった」(3-1) というように、ソーシャルスキルの低さや自尊感情の低さ(4-1)が読み取れる。しかしロッククライミングという触媒が介入することにより、人間関係が促進され、「他人を知ることが面白い」(3-1)と肯定的に変化を引き起こした。また、将来に向けて「他者への関心が高まった」(5-1)と述べている。

6. 結論

野外教育実習は、人里を離れ、すべてを学生たちが自分たちで準備し、動かなければご飯すら食べることができない。全員が何かしらの役割を果たすことになり、頼り、頼られ、の関係となる。コミュニケーションも濃密となり、課せられた役割を果たすために、それぞれの働きも重要になってくる。もし果たせそうにない人がいれば、その人を責める前に、責めている暇があったら、誰かがバックアップに入らなければ目的が達成できない(ご飯が食べられない)。

このような経験を通し、学生が気づき、学びを得て、それを日常生活で活かすことを目的とし、振り返りを必ず行う。この振り返りを行わずして、教育活動とは言えない。本論では、この振り返りで用いたジャーナルを分析し、学生の中で生じた変化を分類した。

学生4名のジャーナルを時系列で紹介した。
①学生がどのようにグループと関わるか、②学生自身が他者の中でどう動くべきか、③学生自身の自己認識、④他者との関わり方。実習当初はそれぞれに課題、挑戦がありつつ

も、日を迫うごとに経験的にその課題をクリアし、ジャーナル4や5では、次に肯定的につながる変化が述べられていた。

日常生活の場から物理的距離が離れ、精神的負荷も掛かっている状態では、挑戦の度合いが高い。その中では人間関係や社会性、自尊感情、自己有用感、積極性、自発性、自主性、達成感などが非常に高く育まれることが示唆される。

